

平安和文会話文における準体句 —助詞「を」後接の場合—

土岐 留美江

日本語教育講座

Quasi-nominal Phrases in Heian Japanese Conversational Texts —Cases with Postpositional Particle“wo”—

Rumie TOKI

Department of Teaching Japanese as a Foreign Language, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Abstract

This paper examines lexical-semantic properties of verbs, adjectives and auxiliaries appearing in quasi-nominal phrases (quasi-nominal construction with adnominal verbal ending) which are accompanied by postpositional particle “wo,” in comparison with those without postpositional particle, those with postpositional particle “ga” and other attributive constructions such as adnominal clauses or final-attributives (sentences ending in adnominal form) in colloquial Heian Japanese.

The specific findings are as follows:

- (a) In quasi-nominal phrases with postpositional particle “wo”, verbs of emotion/thought/perception, verbs of motion/change, verbs of existence are most frequent, in descending order.
- (b) In quasi-nominal phrases, all adjectives types (emotional, attributive and intermediate) appear.
- (c) In quasi-nominal phrases, past and perfect auxiliaries are frequently used, but some conjecture auxiliaries are also frequent.

It is revealed that there are some usage differences between quasi-nominal phrases with postpositional particle “ga” and those with postpositional particle “wo.” In order to clarify the relationship between quasi-nominal phrases and final-attributives in the syntax of adnominal-ending forms, it is necessary to examine their uses more extensively, including those accompanied by other postpositional particles.

1. はじめに

古代日本語における活用語の連体形には、

- ①連体修飾節を形成する連体用法
- ②そこで文を終止する連体形終止法
- ③名詞を伴わずに連体形だけで名詞句相当の働きをする準体用法

の三つの用法がある。

①は現代日本語にも見られる通常の連体節形成機能であるが、②と③は古代語特有の用法である。

②の連体形終止法については、通常の終止形終止との表現性の差異や文体的特徴、または構文的要因などについて、山内（2003）を代表とする多くの先行研究がある。

また、③の準体用法については、断定の助動詞の活

用語承接の衰退について連体形準体法の消滅と関連づけて論じた信太（1970）や、準体法の消滅過程について連体形や連体形終止との関連で考察した同（1987）、準体助詞「の」の成立との関連を論じた同（2006）、現代語の「の」節「こと」節との関係で、中古語準体句の特徴について述べた近藤（2001）などがある。

古代日本語に見られる連体形の用法の広範囲な広がりは、古代語の大きな特徴の一つであり、なぜ、①連体修飾節形成、②文終止、③名詞句形成、という相互にまったく異なると思われる文法機能が、連体形という同一の文法形式により担われるのかという問題が存在する。

これらの用法の相互の関係については、連体形終止を「準体句の直接表出（山内（2003）p.141）」と見る解釈がなされており、尾上（1982）などでも同様の立

場から連体形終止法の表現性のメカニズムが詳細に分析されている。また、信太知子氏の一連の研究においては、連体形による各用法がしばしば相互に関連づけられて論じられており、特に信太(1996)では、推量辞の出現に着目しつつ、連体句、準体句、接続句、終止形上接句、連体形終止文、係り結び文の六類の句について、連体形による句としての総括的な比較対照が試みられている。

しかし、連体形の各用法の特徴を、データに基づき数量的に比較分析した研究は、いまだ十分になされているとは言い難い。

土岐(2005)では、連体形終止法を終止形終止法やゾ、ナム共起の係り結びと比較し、連体形終止をとる場合に現れる連体形は、他の場合と比較して、動詞、形容詞、助動詞の各品詞別に語の頻出度に特徴があることを明らかにした。また、土岐(2008)では、同様の調査を連体節連体形について行い、結果を連体形終止の場合と比較した。その結果、連体節連体形と連体形終止連体形とでは、各品詞別に頻出する語の傾向に異なる様相が見られることを明らかにした。

残る分析対象である準体句のうち、助詞が後接しないケースについては土岐(2009)で、助詞「が」が後接するケースについては土岐(2010)で考察を行った。本稿では、助詞「を」が後接する準体句について分析を行う。

2. 調査対象資料

本稿で分析対象とした資料および使用テキストは以下の通りである。本稿で引用した土岐(2007)の連体法のデータも同様の資料に拠っている。

『源氏物語』岩波新日本古典大系本

一方、土岐(2005)で連体形終止法および終止形終止法の分析対象とした資料および使用テキストは以下のものであり、源氏のみを使用した準体法および連体法の場合とは調査範囲が異なっている。

『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『堤中納言物語』『落窪物語』『源氏物語』『宇津保物語』：宇津保物語はおうふう「うつほ物語全」、大和物語は岩波旧日本古典大系本、その他は岩波新日本古典大系本による。

また、諸本の校異で当該の形態に異同があるものはすべて対象から除外した。

3. 分析対象形式

土岐(2005)で考察した連体形終止については、地の文と会話文とで大きく用法が異なることが先行研究により指摘されているため、会話文中のデータに限定して考察を行った。これらとの比較上、連体法を分析した土岐(2008)や、助詞無し準体法および「が」準体法を分析した土岐(2009)、土岐(2010)でも同様に会話文中のデータに限定して分析を行った。そこで、

本稿で扱う「を」準体法の用例も、以下、会話文中のデータに限定して考察を進めていく。

また、「～給ふ」、「～侍り」、(ラ)ル、(サ)スなどの待遇表現の補助動詞、助動詞が後接している場合は分析対象に含めている。このような待遇表現の接辞が入る場合と入らない場合とで、何らかの相違があるか否かという点については、今後、吟味していく必要がある。

4. 分析

4.1. 助動詞を含まない動詞準体句

助詞「を」が後接するケースには、格助詞相当のものと接続助詞相当のものとが含まれるが、信太(1987)で指摘されているように、判別に困難が伴う場合も多い。本稿では、少しでも格関係が認められるものは準体句として扱うことにする。

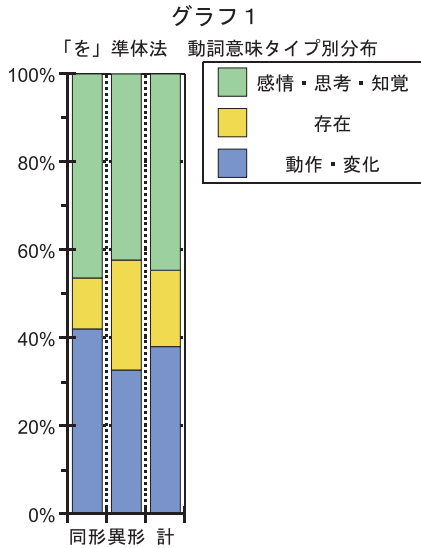
格助詞と認定された「を」準体法の用例を、終止形・連体形異形の活用語と、形態からは活用形の判別がつかない終止形・連体形同形の活用語とに分けて、動詞の意味タイプ別に分類したのが、次の表1およびグラフ1である。また、参考として、接続助詞と認定された「を」が考察するケースについても同様に分類し、表1'およびグラフ1'に示す¹。

なお、間投助詞と認定されたものは助動詞「べし」の一例のみであった。次に示しておく。

1) (薫)あな苦しや。あか月の別れや、まだ知らぬことにて、げにまどひぬべきを と嘆きがちなり。(4,394,14総角)

表1 「を」準体法 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	28(42)	17(33)	45(38)
存在	8(12)	13(25)	21(17)
感情・思考・知覚	31(46)	22(42)	53(45)
計	67(100)	52(100)	119(100)



格助詞「を」と接続助詞「を」で、分布傾向に際違った相違は認められないが、格助詞「を」の場合と比較して接続助詞「を」の場合は、感情・思考・知覚動詞の比率が若干増加し、その分、動作・変化動詞の比率が低い。ともに一番比率が高いのが感情・思考・知覚動詞であり、次が動作・変化動詞、一番比率が低いのが存在詞となっており、連体形終止の場合の分布傾向に類似している。

以下の表2とグラフ2に、同形活用語と異形活用語の合計の数値を用いて、連体法と連体形終止、更に助詞無し準体法と「が」準体法とを加えて分布を比較して示す。

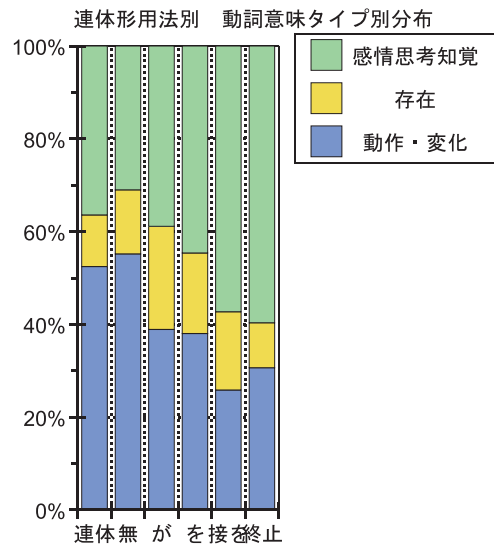
表2 連体形用法別 動詞意味タイプ別分布一覧

	連体法	準体法			接助 を	終止法
		無	が	を		
動作・変化	731	16	7	45	23	19
存在	155	4	4	21	15	6
感情思考知覚	508	9	7	53	51	37
計	1394	29	18	119	89	62

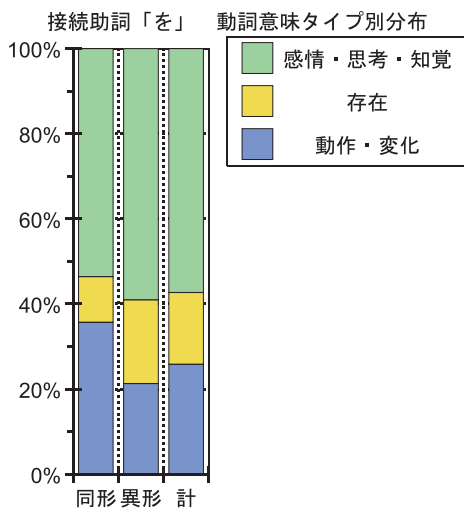
表1' 接続助詞「を」 動詞意味タイプ別分布

	終止・連体 同形	終止・連体 異形	計
動作・変化	10(36)	13(21)	23(26)
存在	3(11)	12(20)	15(17)
感情・思考・知覚	15(54)	36(59)	51(57)
計	28(101)	61(100)	89(100)

グラフ2



グラフ1'



最左端が連体法であり、次の無助詞準体法から、「が」準体法、「を」準体法、接続助詞「を」後接例、連体形終止法と、順に感情・思考・知覚動詞の比率が高まっていき、ほぼそれに反比例するように動作・変化動詞の比率が下がっている。

すなわち、準体法の分布は助詞の種類により相互に連続性を有していると思われるのであるが、その中でも、やはりかなりの相違が見られ、連体法の分布に近似しているか、連体形終止法の分布に近似しているかという点では、無助詞が最も連体法に近似し、接続助詞「を」の用法を持つ「を」助詞が最も連体形終止法に近似した分布傾向を示している。

以下に「を」準体法の動詞意味タイプ別全例を挙げる。

4.1.1 動作・変化動詞

【同形】

- 2) (中将君) おなおそろしや。人の言ふを聞けば、年ごろおほろけならん人を見じとのたまひて (5,137,10)
- 3) (女御) かくの給ひさはぐを、はしたなう思はるゝにも、かたへはかゝやかしきにや (3,18,1)
- 4) (内大臣) おとゞもおほし知れることなるを、かくをきてきこえ給、やうあらんとは思たまへながら (2,293,9)
- 5) (源氏) その世のことは、みな昔語りになりゆくを、はるかに思ひ出づるも心ほそきに、うれしき御声かな (2,262,15)
- 6) (左馬頭) にくゝなるをも知らで (1,52,7)
- 7) (女房) かくなやましくせさせ給を、見をきたてまつり給て、いまはをこたりはて給にたる御あつかひに、心を入れ給へること (3,383,12)
- 8) (朱雀院) かくなんすゝみのたまうを、いまは限りのさまならば、片時のほどにてもその助けあるべきさまにてとなん思給ふる (4,16,11)
- 9) (乳母) かくの給をいとさいわひありと思給ふるを (2,339,9)
- 10) (妹尼) まれ／＼物の給をうれしと思ふに、あな いみじや (5,331,2)
- 11) (僧都) とまれかくまれ、おほしたちての給を、三宝のいとかしこくほめ給こと也、ほうしにて聞こえ返すべきことにあらず (5,364,13)
- 12) (親) わが両つの途歌ふを聴け (1,57,3)
- 13) (源氏) むかしより、みづからぞかゝる本意深きを、とまりてさう／＼しくおほされん心ぐるしさにひかれつゝ、過ぐすを、さかさまにうち捨てたまはむとやおほす (3,356,5)
- 14) (明石母) 京の人の語るを聞けば (2,39,10)
- 15) (仲人) たゞ中のこのかみにて、年もおとなび給を、心ぐるしきことに思てそなたにとおもむけて申さ

れけるなりけり (5,135,1)

- 16) (女五宮) いよいよあるかなきかにとまりはべるを、かく立ち寄り問はせ給になむ、もの忘れしぬべくはべる (2,253,3)
- 17) (使者) 風は時／＼吹出でて、日ごろになり侍を、例ならぬことにおどろき侍なり (2,53,10)
- 18) (弁) この宮わたりにも、ときどきほのめかせたまふを、待ち出でたてまつりてしは、すこし頼もしく (4,331,5)
- 19) (藤壺) かくはづかしき人まいり給を、御心づかひして見えたてまつらせ給へ (2,171,7)
- 20) (源氏) 前齋宮のおとなびものし給をだにこそ、あながちに扱ひきこゆめれば (2,216,14)
- 21) (内大臣) 女御の世中思ひしめりてものし給を、心ぐるしう胸いたきに、まかでさせたてまつりて、心やすくうち休ませたてまつらん (2,302,13)
- 22) (内大臣) 女御かくてもものし給をおきて、いかゞもてなさまし (3,111,7)
- 23) (女五宮) いと涙がちにて過ぐしはべるを、この宮さへかくうち捨て給へれば (2,253,2)
- 24) (中将君) 世に似ず荒ましきところに、年月を過ぐしたまふを、あはれとおほしぬべきわざになむ (5,235,8)
- 25) (下種) 内大臣殿の御願果たしに詣で給ふを、知らぬ人もありけり (2,113,3)
- 26) (女房) うるさきたはぶれ事言ひかゝり給を、わづらはしきに (2,357,2)
- 27) (源氏) こゝになどさぶらひ馴れ給を見る／＼も、はじめの心ざし変わらず (3,288,5)
- 28) (中君) さらば対面もありぬべけれど、しばしのほども心ほそくて立ちとまり給ふを見をくに、いとゞ心もゆかずなん (5,15,10)
- 29) (夕霧) なか／＼おほし疎まんがわびしさに、いみじく籠め侍を、今はたおなじと思給へわびてなむ (3,94,9)

【異形】

- 30) (小少将) こしらへきこゆるをもつらしとのみおほされたれば、何ごとも身のためこそはべれ (4,139,13)
- 31) (尼) 大将殿おはしまして、御あるじのことにわかにするを、いとよきおりなりとこそありつれ (5,399,8)
- 32) (右近) かくなむのたまはするを、なをいとかたはならむとを申させ給へ (5,206,10)
- 33) (中将) かうおほしの給はするを、これは、契りことなるともいかゞは奏しなをすべきことならむ (4,278,8)
- 34) (時方) 言つくることなくて時方まかりたらんを、ものの聞こえ侍らば、おほしあはすることなどや

侍らむ (5,266,7)

- 35) (源氏) 塩焼衣のあまり目馴れ、見立てなくおほさるゝにやとて、とだえをくを、またいかゞ (2,260,11)
- 36) (右近) いかにならせ給にけん、と聞こえ出づるを、聞こしめしをきて (2,353,8)
- 37) (源氏) このごろおさなき人の、女房などに時／＼読まするを立ち聞けば (2,438,11)
- 38) (内大臣) はか／＼しからぬ者どもの、かた／＼につけてさまよひ侍を、かたくなしく見ぐるしと見侍につけても (3,73,1)
- 39) (僧都) かゝる人、世にある物とも知られじと、よくもあらぬかたきだちたる人もあるやうにおもむけて、隠し忍び侍を、事のさまのあやしければ啓し侍なり (5,372,5)
- 40) (夕霧) 年の数添ふまゝに、内にまいるよりほかのありき、うめ／＼しうなりにて侍れば、いにしへの御物語りも、聞こえまほしきおり／＼多く過ぐし侍をなむ (4,257,3)
- 41) (御息所) 乱り心ちもあやしう、ほれ／＼しうて過ぐし侍を、かくたび／＼重ねさせ給御とぶらひのいとかたじけなきに (4,40,15)
- 42) (中君) 泔のなごりにや、心ちもなやましくて起きる侍るを、渡り給へ (5,161,5)
- 43) (薫) たゞ山里のやうにいと静かなる所の、人も行きまじらぬはべるを、さもおほしかけば、いかにうれしくはべらむ (4,370,10)
- 44) (源氏) 中納言の朝臣のまめやかなる方はいとよく仕うまつりぬべく侍を、何事もまだ浅くて、たより少なくこそ侍らめ (3,230,3)
- 45) (中將) 山籠りもうら山しう、常にいで立ち侍を、おなじくはなど、慕ひまとはさるゝ人々に、妨げらるゝやうに侍てなん (5,343,2)
- 46) (源氏) 尼君ましてかやうのことなど諫めらるゝを、心はづかしくなんおほゆべき (1,132,4)

4.1.2 存在動詞

【同形】

- 47) (乳母) うち捨てたてまつり給へる若君の、らうたくあはれにておはしますを、よみぢの絆にもてわづらひきこえてなむ、瞬き侍 (2,348,13)
- 48) (右近) 御供の人も率ておはしまさず、やつれてのみおはしますを、さる物の見つけたてまつりたらむは、いとみじくなむ (5,246,4)
- 49) (惟光) ものなど言ふ若きおもとの侍をそらおほれしてなむ隠れまかりありく (1,112,3)
- 50) (命婦) あやしき事の侍を、聞こえさせざらむもひが／＼しう、思ひ給へわずらひて (1,228,11)
- 51) (薫) さすがに年経ぬる人の侍を、あやしき所に捨てをきて、いみじくもの思なるが心ぐるしさに、

近う呼び寄せてと思はべる (5,231,1)

- 52) (妹尼) かゝる谷の底には誰かは尋聞かと思つ、侍を、いかでかは聞きあらはさせ給へらん (5,348,2)
- 53) (明石の君) 御心にも知らせたてまつるべきおりあらば、御覧じをくべくやとて侍を、たゞいまは、ついでなくて何かはあけさせ給はん (3,285,15)
- 54) (源氏) いかで聞こえ知らせんと思ふことの侍を、さるべきついでなくては対面もあちがたければ、おほつかなくてなむ (3,65,12)

【異形】

- 55) (源氏) こゝにいとあやしきことのあるを、あさましと言ふにもあまりてなんある (1,127,8)
- 56) (源氏) このころ紅葉を言ひくたさむは、竜田姫の思はんこともあるを、さし退きて、花の陰に立ち隠れてこそ強き言は出で来め (2,326,7)
- 57) (源氏) をのづからこと／＼しくなむあるを、ようめしたまへ (2,434,3)
- 58) (帝) くちおしう、宿世ことなりける人なれど、さおほしし本意もあるを、宮仕へなど、かけ／＼しき筋ならばこそは思絶え給はめ (3,112,1)
- 59) (帝) よろこびなども、思知り給はんと思ふことあるを、聞き入れ給はぬさまにのみあるは (3,136,4)
- 60) (紫上) 見をよぶことの、心いたる限りあるを、みづからはえつしもさぶらはざらむほど、うしろやすかるべく (3,189,8)
- 61) (時方) 人に知られさせ給はぬ御ありきは、いとかる／＼しくなめげなることもあるを、すべて内などに聞こしめさむことも身のためなむいとからき、といみじく申させ給けり (5,211,3)
- 62) (僧都) めづらしき事のさまにもあるを、世語りにもし侍ぬべかりしかど、聞こえありてわづらはしかるべきことにもこそと、この老い人ものとかく申て、この月ごろをとなくて侍つるになむ (5,395,8)
- 63) (薫) とある事もかゝることも、ながらふればなほるやうもあるを、あぢきなくおほししみけんこそ、我あやまちのやうになをかなしけれ (5,87,1)
- 64) (源氏) 桂に見るべきことはべるを、いさや、心にもあらでほど経にけり (2,199,4)
- 65) (中將君) その方ならで、思ほし放つまじき綱も侍るをなん、とらへ所に頼みきこえさする (5,166,12)
- 66) (大宮) 中將のうらめしげに思はれたることもはべるを、はじめのことは知らねど、いまはげに聞きにくゝもてなすにつけて (3,66,1)
- 67) (柏木) また心のうちに思ひたまへ乱るゝ事の侍るを、かゝるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひ侍れど (4,24,3)

4.1.3 感情・思考・知覚動詞

【同形】

- 68) (右近) 心うき身なりとのみ、いはけなかりし程より思ひ知るを、人数にいかで見なさんとのみよろづに思ひあつかひ給母君の、中／＼なることの人笑はれになりては (5,287,10)
- 69) (源氏) さばかりに思ふを知らで (1,137,12)
- 70) (源氏) いはけなげなる下つ方もまぎらはさむなど思ふを、めざましとおぼさずは引き結ひたまへかし (2,209,13)
- 71) (右近) われいかで尋ねきこえむと思を、聞き出でたてまつりたらば (2,353,9)
- 72) (朱雀院) 心をかたてまつる事もありけんと思ふを、年ごろ事に触れて、そのうらみ残し給へるけしきをなん漏らし給はぬ (3,209,13)
- 73) (源氏) 又かくとりわきて聞きをきたてまつりてんをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなさなりや(3,223,2)
- 74) (大君) 亡せ給てのち、いかで夢にも見たてまつらむと思ふを、さらにこそ見たてまつらね (4,447,12)
- 75) (中君) 心づかひして、便なうはもてなしきこえじと思ふを、いかに推しはかり給ふにか (5,166,9)
- 76) (薫) この寝殿こほちて、かの山寺のかたはらに堂建てむとなん思ふを、おなじくはとくはじめてん (5,87,8)
- 77) (薫) かつ知りながら、うきを知らず顔なるも、世のさがと思ふたまへ知るを、一ところしも、あまりおほめかせ給らんこそくちをしかるべけれ (4,317,2)
- 78) (頼朝) とさまかうざまにつけてをろかにはあらじと聞こえわたるを、女の御心の乱りがはしままに、かくうらみわたり給。(3,117,7)
- 79) (薫) こゝになむ、ともかくも聞こえさせなすべきと頼むを、つれなき御けしきなるは、もてそこなひきこゆるぞと、たび／＼^ゝ怨じ給へば (4,367,14)
- 80) (源氏) 上のおぼつかながりきこえさせ給を、まづ見たてまつりてくはしく奏し侍らむ (1,251,6)
- 81) (女三宮) 年ごろ見奉らざりしほどよりも、院のいと恋しくおほえ給を、又も見奉らずなりぬるにや (4,15,2)
- 82) (弁) かやうの御供にも、思かけず長き命いとおほえ侍を、人もゆゝしく見思ふべければ、今は世にある物とも人に知られ侍らじ (5,13,8)
- 83) (薫) 大方にはまいりながら、この御方の見参に入るのかたく侍れば、いとおほえなく翁びはてにたる心ちし侍を、いまよりはと思ひおこし侍てなん。(5,303,15)
- 84) (乳母) いとあやしく侍つる事のなごりに、身も

あつうなり給て、まめやかに苦しげに見えさせ給ふを、いとおしく見侍 (5,162,13)

- 85) (少納言) たゞいまはかけてもいと似げなき御事と見たてまつるを、あやしうおぼしの給はするもいかなる御心にか (1,190,3)
- 86) (女五宮) さるべき御ゆかり添ひて、親しく見たてまつり給を、うらやみはべる (2,254,10)
- 87) (源氏) こゝにはけしうはあらず見え給を、まだいとたゞよはしげなりを、見捨てたるやすに思はるゝも、いまさらにいとほしくてなむ (3,380,11)
- 88) (御息所) さらばみづからの心をきてのをよばぬなりけりと思給なしてなん見奉るを、かく夢のやうなることを見給るに、思給へ合すれば (4,35,4)
- 89) (弁) かしこけれど、かくいとたづきなげなる御ありさまを見たてまつるに、いかになりはてさせ給はむと、うしろめたくなしくのみ見たてまつるを、後の御心は知りたけれど、うつくしくめでたき御宿世どもにこそおはしましけれとなむ、かつ／＼^ゝ思ひきこゆる。(4,402,10)
- 90) (阿闍梨) さりとも涼しき方にぞと思ひやりたてまつるを、先つころの夢になむ見えおはしましし (4,453,9)
- 91) (浮舟) 僧都の下りさせ給へらんに、思むこと受け侍らんなむ思侍を、さやうに聞こえ給へ (5,362,9)
- 92) (中君の文) ことさらに、又、巖の中もとめんよりは、荒らしはつまじく思ひ侍を、いかにもさるべきさまになさせ給はば、おろかならずなん。(5,93,14)
- 93) (源氏) 心寄せたてまつるを、かの世ながらも見なおされぬらむ (3,352,10)
- 94) (源氏) 年ごろ御行くゑを知らで、心にかけぬ隙なく嘆き侍を、かうて見たてまつるにつけても (2,364,9)
- 95) (右近) たまさかにもかく渡りおほしますを、待ちきこえさせ給に (5,286,15)
- 96) (仲人) 月ごろうちの御方に消息聞こえさせ給を、御ゆるしありて、この月のほどにと契りきこえさせ給侍を (5,130,10)
- 97) (藤壺) かう聞こえ給を、深うしもおぼし咎めじと思ひたまふる (2,126,2)
- 98) (弁) 心ざし深くありがたげに聞こえ給を、あながちにもて離れさせ給ふて (4,403,5)

【異形】

- 99) (大君) げにかゝるすまゑも、たゞこの御ゆかりにところせくのみおほゆるを、まことにむかしを思きこえ給心ざしならば、おなじことに思ひなし給へかし (4,401,14)
- 100) (源氏) いたうたて心得ぬ心ちするを、かの御ゆるしなくともたばかれかし (1,213,7)

- 101) (源氏) 世にたぐひあるまじきこゝちなんするを、このをとづれきこゆる人／＼には、おほし落とすべくやはある (2,416,7)
- 102) (源氏) この扇の尋ぬべきゆへありて見ゆるを、なをこのはたりの心知れらん者を召して問へ (1,104,5)
- 103) (尼君) 思ひたまへ乱るゝを、をしはからせ給ひければ (2,201,12)
- 104) (女五宮) 内の上なむいとよく似たてまつらせ給へり、と人／＼聞こゆるを、さりとも劣り給へらむとこそをしはかりはべれ (2,254,2)
- 105) (源氏) かう何やかやと聞こゆるをも、おぼす所やあらむとや、ましきを (2,411,10)
- 106) (夕霧) かう世づかぬまで痴れ／＼しきうしろやすきなどもたぐひあらじとおほえはべるを、何事にもかやすきほどの人こそかゝるをば痴物などうちはらひてつれなき心もつかふなれ。(4,98,8)
- 107) (少納言) なをいと夢の心ちし侍るを、いかにし侍べき事にか (1,193,14)
- 108) (内大臣) 内にさぶらふが、世の中うらめしげにて、この比まかでて侍るにいとつれ／＼に思ひて屈し侍れば、心ぐるしう見給ふるを、もろともに遊びわざをもして慰めよと思ふたまへてなむ、あからさまにものし侍 (2,303,14)
- 109) (大和守) いたい／＼しう、いかにと見給ふるを、かくよろずにおほし営むを、げにこの方にとりて思給ふるには (4,136,15)
- 110) (源氏) かうまでも仕うまつり御覧ぜらるゝをなむ、慰めに思ふ給へなせど (2,241,7)
- 111) (源氏) すこし物の心知る人はさぶらはれてもよくやと思ひ給ふるを、御定めに (2,125,13)
- 112) (左大臣) なづさききこえぬ月日や隔たり給はむと思たまふるをなむ、よろづのことよりもかなしう侍 (2,8,5)
- 113) (源氏) 世の聞き耳もいと苦しく、つゝましく思たまへらるゝを、罪なきさまにもて隠されたてまつりつゝのみこそ (3,289,13)
- 114) (薫) うちつけに浅き心がかりにては、かくも尋ねまいるまじき山の懸路に思ふ給ふるを、さま異にこそ (4,316,9)
- 115) (御息所) もしかひなくなりはてはべりなば、このかしこまりをだに聞こえさせでや、と思ひ給ふるをなむ、いましばしかけとゞめまほしき心つきはべりぬる (4,92,1)
- 116) (妹尼) いみじくかなしと思ふ人の代はりに、仏の導き給へると思ひきこゆるを、かひなくなり給はば、中／＼なることをや思はん (5,330,13)
- 117) (監) おとゞもしぶ／＼におはしげなる事は、よからぬ女どもあまたあひ知りてはべるを、聞こしめしうとむななり (2,339,6)

- 118) (夕霧) むかしを思ふたまへ出づる御かはりどもには、身を捨つるさまにもとこそ思給へ知り侍を、いかに御覧じなすことにか侍らん (3,181,9)
- 119) (夕霧) わが心ながらいにしへだにをもかりけりと思ひ知らるゝを、いまはかくにくみ給とも、おほし捨つまじき人々、いとところせきまで数添ふめれば (4,146,1)
- 120) (源典侍) 聞こしめしたらむと頼みきこえさするを、世にあるものとも数まへさせたまはぬになむ (2,262,9)

4.2. 助動詞を含まない形容詞準体句

「を」準体法の形容詞の例について、形容詞の意味についてA B Cの類型を立てて考察した吉田 (1995) にならい、A 情意的 (感情形容詞、評価形容詞)、C 属性的 (次元形容詞²、色彩形容詞、その他)、その中間的なB (否定形容詞、程度形容詞、感覚形容詞、時間形容詞) という三つの類型に分け、更にAの感情・評価形容詞の評価的意味について、プラス評価は+、マイナス評価は-という独自の符号を付したのが、次の表3である。また、接続助詞「を」後接のケースについても同様に表3'に示す。

表3 「を」準体法形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	7	B	0
かたし (がたし)	3	A	0
深し	3	C	0
多し	3	C	0
なやまし	2	A	-
あさまし	1	A	-
いぶせし	1	A	-
うし	1	A	-
うたてし	1	A	-
うらやまし	1	A	-
をさなし	1	A	0-
かうばし	1	A	+
苦し	1	A	-
子めかし	1	A	+ -
少なし	1	C	0
つゝまし	1	A	-
つらし	1	A	-
はかなし	1	A	-
見ぐるし	1	A	-
らうたし	1	A	+

計33例

表3' 接続助詞「を」形容詞総数順

形容詞	総数	類型	評価
なし	15	B	0
かたし(がたし)	8	A	0
心ぐるし	3	A	-
苦し	3	A	-
あやなし	2	A	-
心やすし	2	A	+
なやまし	2	A	-
便なし	2	A	-
深し	2	C	0
あし	1	A	-
ありがたし	1	A	+
いとほし	1	A	+ -
うし	1	A	-
うしろめたし	1	A	-
うたてし	1	A	-
おそろし	1	A	-
多し	1	C	0
かたじけなし	1	A	+
かたはらなし	1	A	+
かなし	1	A	+ -
さう／＼し	1	A	-
しるし	1	B	0
少なし	1	C	0
つゝまし	1	A	-
見ぐるし	1	A	-
むつかし	1	A	-
やすげなし	1	A	-
やゝまし	1	A	-
益なし	1	A	-
若／＼し	1	A	0 -

計60例

格助詞「を」の場合(準体法)も接続助詞「を」の場合もともに、A(情意的)とB(中間的)とC(属性的)のすべての類型が現れ、かつプラス評価的な意味を伴う形容詞もマイナス評価的な意味を伴う形容詞も現れる。

格助詞「を」準体法の場合にも接続助詞「を」後接の場合にも、ともにC(属性的)形容詞としては、「深し」「多し」「少なし」の3語が現れており、明確なプラス評価的な意味を伴うものとしては、格助詞「を」準体法で「かうばし」「らうたし」、接続助詞「を」後接例で「心やすし」「ありがたし」「かたじけなし」「かたはらなし」が現れている。

連体形終止法では、Cの属性的形容詞は一例も見られず、Bの中間的な「なし」が3例見られる以外は、すべてAの情意的形容詞であり、かつ、Aの情意的形容詞の評価的意味合いは「良し」1例を除き、すべてマイナス評価の意味合いを伴うものであった。一方、連体法では形容詞の用例の総数が多いこともあって、ABCすべての類型が観察され、またプラス評価的意味合いを含む形容詞も豊富に見られた。(土岐(2005、2008))

以上の結果と比較すると、「を」準体法の場合は、土岐(2010)で述べた「が」準体法の場合と同様に、連体法との共通性の高さを示す結果となっている。

一方、動詞節に対する形容詞の出現率については、「を」準体法は27%(動詞節119例、形容詞節33例)、接続助詞「を」後接例では67%(動詞節89例、形容詞節60例)となっている。「が」準体法が29%(動詞節21例、形容詞節6例)、助詞無し準体法は14%(動詞節29例、形容詞節4例)であり、一方、連体形終止法29%(動詞節62例、形容詞節18例)、連体法113%(動詞節1394例、形容詞節1573例)という土岐(2009)、土岐(2010)の結果と比較すると、「を」準体法は「が」準体法の場合と同様に、連体形終止法との共通性の高さを示す結果となっている

前稿でも述べたように、連体法と終止法の形容詞については、6例以上出現した形容詞に限定した分析である。準体法の場合は、形容詞全体の総数が少ないため、現れるすべての形容詞を扱っている。そのため、厳密な意味での両者の比較は難しいが、以上の結果から、「を」準体法の形容詞については、意味の種類の観点からは、連体法に近く、動詞と比較した出現率の観点からは、連体形終止に近い特徴を示していると言えよう。

以下に「を」準体法形容詞の全用例を示す。

【同形】

- 121) (ある人) ししこらかしつる時はうたて侍を、とくこそ心みさせたまはめ (1,152,5)

【異形】

- 122) (落葉宮) うきみづからの罪を思ひ知るとても、いとかうあさましきを、いかやうに思ひなすべきにかはあらむ (4,98,15)
- 123) (源氏) 上の、御心に背くと聞こしめす覧ことの、やすからずいぶせきを、こゝにだに聞こえ知らせでやはとてなむ (3,396,7)
- 124) (源氏) 世のはかなくうきを知らすべく仏などのをきて給へる身なるべし (4,189,7)
- 125) (夕霧) ましが常に見るらむもうらやましきを、また見せてんや (2,313,10)
- 126) (空蝉) いかう心おさなきをかつはいかに思ほ

- すらん (1,93,15)
- 127) (女房) 香のかうばしきをやんごとなきに、私の給をきけるもことほりなりや (5,151,9)
- 128) (夕霧) 思ひ捨てがたきを、ともかくもてなしはべりなむ (4,153,7)
- 129) (匂宮の文) 猶かうまいり来ることいとかたきを、思ひわびて、近う渡ひたてまつるべきことをなむ、たばかり出でたる (4,467,11)
- 130) (夕霧) 世中のしれがましき名を取りしかど、たへがたきを念じて (4,145,13)
- 131) (紫上) かねてよりもさやうに思しかど、ついでなきにはつゝましきを、かゝるおりに聞こえ馴れなば、心やすくなんあるべき (3,257,7)
- 132) (頭中将) つらきをも思ひ知りけりと見えむはわりなく苦しきものと思ひたりしかば (1,55,4)
- 133) (朱雀院) 中にも、又思譲る人なきをば、とりわきうしろめたく見わづらひ侍 (3,228,9)
- 134) (源氏) 改むることもなきを、かゝる末／＼のもよをしになん、なまはしたなきまで思知らるゝおりも侍ける (3,235,9)
- 135) (源氏) とゞめがたき物の音どもの、いづれともなきを、聞き分くほどの耳とからぬたど／＼しさに、いたくふけにけり (3,346,9)
- 136) (中将君) ひたおもむきに二心なきを見れば、心やすくて年ごろをも過ぐつる也 (5,138,4)
- 137) (匂宮) たしかには知るべきやうもなきを、たゞものよりのぞきなどして、それかあらぬかと思定めむとなむ思 (5,198,12)
- 138) (侍従) 御前にも、物をのみいみじくおほめしたるは、かゝる御ことのかたじけなきをおほし乱るゝにこそと、心ぐるしくなむ見たてまつる (5,252,5)
- 139) (匂宮) げに世の中の常なきをも、心ほそく思ひ侍 (5,276,12)
- 140) (藤壺) 心ちのいとなやましきを、かゝらぬおりもあらば聞こえてむ (1,362,8)
- 141) (鬘黒) にはかにいと乱り風邪のなやましきを、心やすき所にうち休み侍らむ程 (3,138,11)
- 142) (源氏) 世の中のはかなきを見るまゝに、行く末みじかうもの心ほそくて (4,13,7)
- 143) (夕霧) かしこにも人／＼のらうたきを、おなじ所にてだに見たてまつらん (4,153,11)
- 144) (物の怪) 身の上のいと苦しきを、しばしやすめ給へと聞こえむとてなむ (1,307,1)
- 145) (薫) とりあへぬさまの見ぐるしきを、つきづきしくもて隠して (5,75,15)
- 146) (源氏) よしなからぬ親の心とゞめて生ほしたてたる人の、子めかしきを生けるしるしにて (2,441,15)
- 147) (源氏) たゞさるもののくさの少なきを、かこと

- にても、何かはと思ふたまへゆるして (3,66,15)
- 148) (源氏) 女といふ物の心深きをあまた見聞しかば (2,361,10)
- 149) (朱雀院) 年ごろをこなひの本意深きを、後の宮おはしましつる程は、よろづ憚りきこえさせ給て、いままでおぼしとゞこほりつるを (3,206,3)
- 150) (源氏) むかしより、みづからぞかゝる本意深きを、とまりてさう／＼しくおぼされん心ぐるしさにひかれつゝ、過ぐすを、さかさまにうち捨てたまはむとやおぼす (3,356,4)
- 151) (左馬頭) 心ひとつに思ひあまる事など多かるを、何にかは聞かせむと思へば、うち背かれて (1,40,9)
- 152) (源氏) 多くの調べ、わづらはしき曲多かるを、心に入りし盛りには、世にありとあり、こゝに伝はりたる譜といふもののかぎりを、あまねく見合わせて (3,344,13)
- 153) (中将君) よろづ多く思ひはゞかる事の多かるを、月ごろかうの給てほど経ぬるを (5,127,13)

4.3. 助動詞を含む準体句

受け身と自発の(ラ)ル、使役の(サ)スなど、待遇表現以外の助動詞が現れる場合について、総数が多い順にまとめたのが次の表4である。また、接続助詞「を」後接例についても同様に、表4'として次に示す。

助動詞が現れる場合、節述語の中心となる品詞は動詞、形容詞、名詞と多岐に渡り、また、複数の助動詞が相互に接続するケースも多いが、述語の中心的品詞の種別は問わず、また、複数の助動詞が現れる場合は最句末のもののみを取り上げる。

表4 「を」準体法 助動詞総数順

形式	総数
キ	96
ム	40
ケリ	39
ズ	27
メリ	22
ツ	18
リ	17
ベシ	14
ヌ	13
体言ナリ	12
タリ	12
マジ	8
連体ナリ	6
ケム	3
終止ナリ	2
マホシ	2

ラム	2
サス	1
ジ	1
ムトス	1
ラル	1
ル	1

計338例

表4' 接続助詞「を」 助動詞総数順

形式	総数
キ	82
メリ	39
ベシ	32
ズ	28
ケリ	27
ツ	24
ム	12
体言ナリ	11
ヌ	11
タリ	10
連体ナリ	10
マジ	7
リ	6
マホシ	5
ケム	3
ジ	3
終止ナリ	3
マシ	2
ラム	2
ル	2
サス	1
ス	1
ラル	1

計322例

「を」準体法(表4)と接続助詞「を」(表4')で分布の際だった傾向差は認められないようである。両者とも抜きん出て多いのが過去の助動詞のキであり、それぞれ総計338例中96例(28.4%)、総計322例中82例(25.5%)と、助動詞全体においてかなりの比率を占める。次に「を」準体法は推量のムが、接続助詞「を」は推量のメリが続くが、それぞれ第一位のキの半数にも満たない。以下、過去・完了系のケリ、ツ、リ、ヌ、タリ類と、推量系のメリ、ベシが、否定のズを中程にはさんで入り交じりつつ上位に現れ、次に断定の体言ナリが続いている。

次に、土岐(2010)で示した「が」準体法の助動詞の表を表4"として再掲する。

表4" 「が」準体法 助動詞総数順

形式	総数
ム	18
ケリ	11
ベシ	8
ズ	8
キ	7
タリ	5
終止ナリ	2
体言ナリ	1
メリ	1
ラム	1
ツ	1
ヌ	1
ス	1

「が」準体法と比較すると、「を」準体法は、推量のムがやや後退し、かわりに過去のキが抜きん出ている点が大きく異なるものの、過去・完了系の助動詞が上位に現れ、更に推量系の助動詞も入り交じりつつ比較的上位に現れるという全体的な傾向は類似している。

5. おわりに

本稿での分析結果を以下にまとめる。

古代日本語会話文中の「を」準体句のデータを分析した結果、以下のような特徴が観察された。

1. 助動詞を含まない動詞準体句の場合、現れる動詞の意味タイプは、
 - 1 感情・思考・知覚動詞
 - 2 動作・変化動詞
 - 3 存在詞
 の順に多い。ただし第一位の感情・思考・知覚動詞(47%)と第二位の動作・変化動詞(37%)との差はわずかである。
2. 助動詞を含まない形容詞準体句の場合、形容詞の意味類型は
 - A 情緒的
 - B 中間的
 - C 属性的形容詞
 のすべてが現れる。また、評価の意味を有する形容詞の場合、プラス評価の意味合いを持つものと、マイナス評価の意味合いをもつものとがともに現れる。
3. 助動詞を含む準体句の場合、過去・完了系の助動詞が多い傾向はあるが、推量系の助動詞も上位に現れる。

1については、「が」準体法の分布傾向と比較して、動作・変化動詞が多い連体法との類似度が下がり、感情・思考・知覚動詞が多いことが特徴である連体形終止との共通性が若干増している。

2については、「が」準体法の分布傾向とほぼ同様であり、意味の類型の観点からは連体法との共通性の高さを示す結果となっており、動詞と比較した出現率の観点からは連体形終止法との共通性の高さを示す結果となっている。

3については、全体として過去・完了系の助動詞が上位を占めるものの、推量系の助動詞も上位に現れる「が」準体法の分布傾向とほぼ同様である。ただし、「が」準体法の場合に第一位を占めていた推量のムがやや後退し、かわりに過去のキが二位以下を大きく引き離して第一位を占めている点で、過去・完了系助動詞の優位性がより高くなっている。この点で、より連体形終止の分布傾向との類似性が増していると言える。

今後も引き続き、他の助詞が後接する場合の準体法の分析を進め、それらの結果も併せて準体法の位置について考察していく必要がある。

注

1. この他、確かに用例が存在するのであるが、データ入力のみスで所在がわからなくなったものが数例ある。これらを加えて分類を行ったとしても、全体の分布傾向に大きな影響はない。
2. 吉田 (1995) によると、
せばし、たかし、ちかし、とほし、ふかし、みじかし、
ひろし、ほそし、ちひさし
が例示されている。

主要参考文献

- 尾上 圭介(1982)「文の基本構成・史的展開」森岡健二他編『講座日本語学2 文法史』明治書院 1-19
- 同 (2001)『文法と意味I』くろしお出版
- 小池 清治(1967)「連体形終止法の表現効果—今昔物語集・源氏物語を中心に—」『国文学 言語と文芸』54、12-21
- 近藤 泰弘(1986)「〈結び〉の用言の構文的性格」『日本語学』5-2、22-30
- 同 (2000)『日本語記述文法の理論』ひつじ書房
- 同 (2001)「名詞節と項構造」『日本語文法』1-1、41-52
- 信太 知子(1970)「断定の助動詞の活用語承接について—連体形準体法の消滅を背景として—」『国語学』82、29-41
- 同 (1987)「『天草本平家物語』における連体形準体法について—『覚一本』との比較を中心に消滅過程の検討など—」『近代語研究』7、121-139、武蔵野書院
- 同 (1996)「古代語連体形の構成する句の特質—準体句を中心に句相互の関連性について—」『神女大國文』7、172-189
- 同 (2006)「衰退期の連体形準体法と準体助詞「の」—

- 句構造の観点から—」『神女大國文』17、29-44
- 土岐留美江(2005)「平安和文会話文における連体形終止文」『日本語の研究』1-4、16-31
- 同 (2008)「平安和文会話文における連体修飾連体形と連体形終止連体形の比較分析」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』57、55-62
- 同 (2009)「平安和文会話文における準体句—助詞が後接しない場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』58、31-39
- 同 (2010)「平安和文会話文における準体句—助詞「が」後接の場合—」『愛知教育大学研究報告(人文・社会科学編)』59、15-23
- 山内洋一郎(1959)「院政期の連体形終止」『国文学攷』21、240-250、広島大学国語国文学会
- 同 (1963)「奈良時代の連体形終止」『国文学攷』30、33-41、広島大学国語国文学会
- 同 (1964)「助動詞「うず」について—連体形終止の異例として—」『広島大学文学部紀要』23-3、125-152
- 同 (1970)「下二段「たまふ」の終止法—連体形終止の観点から—」『国文学攷』54、55-58、広島大学国語国文学会
- 同 (1992)「平安時代の連体形終止」井上親雄・山内洋一郎編『古代語の構造と展開』25-44、和泉書院
- 同 (1997)「助動詞「うず」の連体形終止について—中世における終止形の残存—」『文教国文学』37、1-8
- 同 (2003)『活用と活用形の通時的研究』清文堂出版
- 吉田 光浩(1995)「平安期形容詞の意味と終止用法について—『枕草子』『源氏物語』『栄花物語』を資料として—」宮地裕・敦子先生古希記念論集刊行会編『宮地裕・敦子先生古希記念論集 日本語の研究』112-145、明治書院

(2010年8月2日受理)